

歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第五卷「文化財編」を刊行しました。第一章／美の香り、第二章／匠の文化、第三章／住の演出、第四章／地に根ざす、の四章からなる内容の一部をご紹介します。各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込み）で販売しています。ぜひお買い求めください。

第五卷「文化財編」の第一章第二節は「墨に託された歴史 典籍と古文書」と題して、日野町内の神社・寺院などに残る、大般若経・一切経などの仏典、中世を中心とした古文書を取り上げています。

「文化財編」では日野ならではの史料を中心に、日野の歴史を分かりやすく解説しています。ここでは、その中でも代表的な典籍・古文書を紹介します。

大般若経と一切経

大般若経とは、六〇〇巻というまとまりをもつ仏典の名称で、古くから様々な法会場で転読されてきました。日野町内では西明寺（西明寺）や安楽寺（下駒月）、大屋神社（杉）などに中世の大般若経が残されており、江戸時代のものとしては大字大窪の岡本町に伝来したものが知られています。大般若経は繰り返し転読に用いられることで破損することも多く、そ

の度ごとに補修や他所からの購入が行われました。こうした経過は、各巻の末尾に記された「識語」という写経や補修の際の覚書により知ることが出来ます。

また、一切経はすべての仏典の総称をいい、正明寺（松尾）の鉄眼版一切経（写真）は県指定の文化財となっています。鉄眼版は、黄檗宗の僧侶鉄眼によって整備された版本で、正明寺のものは「初禁裏献上本」といい、延宝六（一六七八）年に初めて摺り写さ



▲正明寺の一切経

れ、後水尾上皇に献上された後に同寺に下賜されたこと分かるたいへん貴重なものです。

古文書の語る日野の歴史

經典と並んで、日野の昔の姿を教えてくれるものに、古文書があります。「文化財編」では、県や町の指定文化財を中心に興敬寺（西大路）・金剛定寺（中山）・比都佐神社（十禅師）・馬見岡綿向神社（村井）に伝えられた文書と、近江日野商人館に寄託されている平安文書を取り上げています。

これらの文書はそれぞれの所蔵者にとって重要なものであることは言うまでもありませんが、一方で日野という地域の歴史を知る上でもかけがえのない価値をもっています。

ここでは、平成十（一九九八）年に二〇〇点余りが県指定文化財となった興敬寺文書を例にその一端を見てみましょう。興敬寺には、

日野の中心的な真宗寺院であることを反映して、寺院の由来や縁起を示す文書を始め、本山からの伝達事項や戦国時代の同寺門徒の分布など中世の日野の状況を示す文書が多く伝えられています。本願寺の命令を伝達した文書の中には、織田信長との対立が続く情勢を反映して縦約八センチ、横約二三センチの「矢文」と呼ばれる小型の紙を用いた書状（写真）がみられるなど、この時代ならではの特色がうかがえます。ほかに、近江守護六角氏からの文書や蒲生氏と本願寺とのやりとりを示す文書も残っており、日野の地が近江国内や京都の情勢と密接に関わっていたことが如実に浮かび上がります。



▲「矢文」の一つ下間正秀書状（興敬寺文書）